

## 【入選】

## 万華鏡

あれは中学三年生に進級して間もないころだったと思う。名字がワ行の僕は、クラスの後ろ、しかも端っこに座っていた。人見知りの僕は、四月が苦手だった。町の中でも少し大きな中学校だったので、クラスが入れ替わると、これまでの環境にまるでシャッターが切られたみたいに、僕の周りには大体知らない人になる。教室の木製の椅子の冷たさが、お尻から、ただでさえ身体の中で宙ぶらりんのように感じる胃に、直接伝わってくるような気がする。

研ぎ澄まされた僕の耳が捉えた、担任から「伊予 七月」と呼ばれ、はい、と小声ながら芯のあつる、声変りがようやく馴染んできた声で返事をするのは、このクラスの出席番号一番の男子だった。「いよ」という名字からは「伊予柑」のみずみずしさが、「しちがつ」という名前からは、夏が始まって、とても汗なんてかかなくな白皙はくせきな彼の額に、汗がじんわりにじむ様子を連想させる。

それに、なにより、「いよ しちがつ」という名前を見たとき、廊下に貼り出されていたクラス組表を見たときには女子だと思っていたから、驚いた。

そんなことを思い耽っていた間にも、いつのまにかホームルームは進行していて、彼は担任の推薦という形で、このクラスの学級委員を務めることになっていた。

あの人、学級委員とかやるタイプなんだね、と去年だったかの顔見知りの女子が、僕の隣で、後ろの席のおそらく彼女の友達と喋っている。(結果的にだが)盗み聞いた話によると、彼は、去年も同じ担任のクラスで、学級委員を務めていたからという単純な理由で押し付けられたらしい。

きつと僕だったら、そんな役回りを押し付けられたなら、まず眉を曲げるだろうが、彼の表情は曇ることなく、むしろ役割をもらえたことをありがたいように、二つ返事で了承をしていたのが印象的だった。人をまとめる役割なんてやりたくないと考えていた僕は、なんとなく直観で、彼とは「合わないだろう」と思った。

しかし、そんな予想は大いに外れた。とある生徒が挙げた、「出席番号で決められた席順なんてつまらない」という意見に、賛同の声が次々に上がり、翌日のホームルームではすぐさま席替えが

行われることになった。僕は教室の真ん中の位置になり、伊予はその前の席になった。

「よろしくね、鷺尾くん。あ、呼び方、鷺尾くん いいのかな？ それともなんかあだ名はある？」

これは僕にとっては意外だった。僕の去年のクラスの学級委員は頭が固く、真面目すぎな性格をしていたので、てっきり学級委員を務めるのは皆こういう人物なんだろうと思っていた。そんな固定観念を、僕は彼に持っていたので、まさか向こうから話しかけてくれるとは思ってもみないことだった。

「ああ、うん、よろしく。伊予くんが呼びやすい呼び方でいいよ。逆に、僕はなんて呼べばいい？」

じゃあ、と伊予は、すこし恥ずかしそうに

「七月で」

と答えた。遠くの席で聞いても、近くの席で聞いても、変わった名前だと思った。カレンダーに

自分の名前が載っていると初めて気づいたとき、どう思ったのか聞きたくなかったけれど、もし僕だったら、そういう質問にはウンザリすると思っただから、聞かなかった。

それから七月とは、朝、教室に来てから挨拶を交わし、授業では班活動を共にし、そのまま昼飯と一緒に食べ、帰りのホームルームの号令を掛け終えるまでの時間を、ほとんど一緒に過ごした。一週間もすれば、変わった名前だとも思わなくなつて、呼吸をするように自然に彼の名前を呼べるようになった。七月も最初の「鷺尾」から、名前の「栴」に呼び名を変えるまで、その時間はかからなかつた。

ある朝、教室に入ると、七月は熱心に何かを読んでいた。

おはよ、と軽く声をかけると、「おはよー」という、あくびをしながら涙目になっている七月が適当に返事をした。

「なに読んでんの」と聞くと、「うーん、小説？かな。親が、読めつていうからさ」と、いかにも義務的に読まされている様子が窺えた。

「なにそれ、急に？」と僕も追つて聞くと、「そ、でも前から言われてたんだよねえ」と、半ば本に集中したままの生返事がまた返つてきた。特段、僕も普段から読書をする性格ではないので、その話題はそこで尽きてしまった。

それから、七月は、空いた時間を見つけるとそ

の本を読んでいた。一昨日も、昨日も、今日も、明日も、明後日も。今まで一緒にぶざけたことを話していた時間が、少しずつ無くなつていった。なんだか、七月が七月じゃないような気がした。

でも、それはあくまで「なんとなく」だった。七月は相も変わらず変なことをいうし、学級委員としての仕事も務めている。朝は、おはようと言われ、授業も昼飯を食べる時間もいつも一緒だった。帰りのホームルームが終わつて、「じゃ、お疲れ、また明日ね」というところまで、普段の七月と何一つ変わっていないので、どこもない違和感だけが僕の中に残るだけだった。

そしてその違和感は僕の中で一向に解消されないまま、いつの間にか、季節は夏から秋になり、冬を迎え、あと一週間で、僕たちは中学校を卒業するというところまで来てしまった。

夏が終わつて、少しずつ涼しくなつてきたころには、七月とは、あまり会話を交わさなくなつていった。というか、七月は夏休みが終わつてから、学校を休むことが多くなつていたので、最初はそんな七月のことを心配していた。普段は学校と一緒に過ごしていたから、連絡もあまり取る間柄ではなかつたけれど、割と頻繁に僕は七月にメッセージを送つた。理由も確証もないけれど、ここで僕が連絡をすることを放棄したら、七月との見えない糸のようなものが切れてしまふような気がしたからだ。

けれど、七月からは三日に一回くらい返事が返つてくれば良いほうだった。今、どうしてんの、

と聞くと、「べんきょーしてるよー」という返事がくる。たまに学校に来た七月に同じことを聞いても同じようにのらりくらり交わす様子から、あまり詳しいことを話したくないという意思が、あまり他人の心情変化に鈍感な僕にも分かつた。

それに、二カ月に一回行われる席替えで、七月とは近くの席になることが少なくなった。糸を切れさせまいという僕とは反対に、糸にハサミを入れようとしている何者かがいるんじゃないかと思えた。

やがて、いつの間にか僕にも新しい友達とグループができて、最近はそのグループと一緒につるむようになった。

秋が終わると、七月は本格的に学校に来なくなり、今日、卒業式の一週間前、僕は久しぶりに七月の顔を見た。

「おはよう、久しぶり」

と空いた時間を感じさせない七月に、僕は少し戸惑つた。おはよう、と返すと、「もう話してこないかと思つてたよ」と言うので、それはこつちのセリフだよ、と僕は七月の肩を左腕で抱えた。その後の一週間は、二人の、あの時間を埋めるように過ごした。卒業式の予行練習では、担任が「伊予 七月」と呼名をするときにフザけた返事をして、体育館の端で七月は思いきり学年主任の先生に怒られていた。その様子を見て僕は笑つたし、七月も先生の隙を見つけてはこちらに向かつてニヤニヤしていた。

そして、三日後には卒業式が無事に終わった。

僕たちは、体育館から教室まで戻る渡り廊下を、二人で歩いた。空気がゆっくり、けれどだんだんと重たくなる感じがした。

「早いな、一年が過ぎるのってさ」七月が、ゆっくり口を開いた。

「そうだよ、僕らが友達になって、まだ一年しか経ってないんだよね」僕も、今までを振り返るように、噛みしめながら返事をした。

渡り廊下の錆びた窓枠にはめられた傷の少しついたガラス窓から、校舎の昇降口の近くに植わっている大きな桜の木に、淡い桃色の花が咲いているのが見える。

「あのお、聞かれるの、嫌なら答えなくても良いんだけどさ」次は僕から、ゆっくり口を開いた。

「学校、急に来なくなったじゃん。」

「くく、そうだね。心配とかしちやっつけてた？」七月は茶化すように笑う。

「そりゃ心配するよ、連絡してもあんまり返信なかったから。」

「ああ、ごめんごめん。実はさ、俺、高校、少し遠くの私立に行くことになったんだ。でも俺、バカだからさ、特別に学校休んで、ずっと塾通ってたんだ。」

なんとなく七月に感じていた違和感は、僕の中で一つ確信めいた。たぶん、七月は、僕に嘘を吐いている。限りなく本当に近い、嘘。多分、僕でなければ気が付かない嘘だった。こう言い訳すれ

ば、僕からはもうこれ以上深く詮索してはこないだろうと七月はわかっていたんだと思う。七月は、決してバカなんかじゃないと、僕は知っている。

そうしてきつと七月は、川岸の僕に黙って、エンジン音をかけてボートを進めていってしまうんだろうと思った。

「そっかあ、でも、なかなか簡単に会えなくなるのも少し寂しいね。」

僕は、その違和感を心の奥底にそっと隠したまま、川岸で彼を見送ることに決めた。

そうして僕らは無事に、中学校を卒業した。

——ある日の夕方、七月から突然、

「久しぶりにご飯でも行こうよ」

という連絡があったので、僕はオッケー、と二つ返事で了承した。

七月と会うのは卒業以来だった。お互い違う高校に進学して、それこそ最初の頃は連絡を取っていたものの、どちらかが一週間ほどメッセージを返すのを忘れていたことから、連絡は途絶えた。

久しぶりに会う七月は、高校生にしては落ち着きすぎているように見えた。あれからボートは、もうずいぶん遠くまで行ってしまったんだと思った。なんとなく、七月の中に、僕はもういないんだと思った。

あと、服の好みも少し変わっていた。よく着ていた、メッシュ素材のスポーツブランドの、正直言って少しダサかったTシャツから、爽やかな無

地の水色のシャツを羽織るようになっていた。

「柝、久しぶり。って、あれ、なんか少し老けた？」と少し笑って話す感じは、変わっていなかった。

やっぱりここでしょ、と会ってから即決した店は、中学生の時に度々通っていたファミレスだった。金曜の放課後に約束をして、土曜日の午後によくここで、ドリンクバーだけを注文して、延々話しこんだのを思い出す。

ファミレスに着くまでの道では、七月が実はあまり学級委員をやりたくなかったこと、僕のことをいつ名字から名前呼び始めようか迷っていたことなど、僕が知らなかったことを彼は楽しそうに話していた。僕があまり覚えていないクラスでのことや行事の細かい思い出もたくさん机に並べられて、時折僕は、「そんなことあったっけ？」と、とぼけた相槌をしてみた。

席に着いてからは、まるで授業中に教科書を立てて突っ伏して寝ていたあの時のように、僕はメニューで自分の顔を隠してしまった。街にはあまりにも話題にできることが溢れていたのに、こうして面と向かってみると、丸一年、連絡さえ取っていないかった七月とどう話したら良いのかがわからなかったからだ。

すると七月は、

「懐かしいな。俺、このオムライス好きなんだよね。ここの店舗じゃないけどさ、彼女ともよく飯、食べに来てんだよね。」

なぜか緊張していた僕とは裏腹に、中学時代からの時間の経過を感じさせない七月に、僕はなんだか安心した。あの頃の波長を取り戻すように、次第に僕も今の話をした。

部活には中学生のときに所属していたサッカー部ではなく軽音楽部を選んだこと。でも、軽音楽部にはライトな音楽好きがあまりいなかったこと。コンピニでバイトを始めたこと。相変わらず数学が苦手で、テストで赤点を取ったこと。やっぱり四月が苦手で、高校では、入学早々にクラスでできたグループにあまり馴染めなかったこと。

その話を七月は、うんうんと頷いて、相槌をしながらも、たまに、僕の話の誰かに聞かせやすくするように、話を要約しながら聞いていた。その様子を見て僕は、七月がこうやって、人の話を最後まで聞くことのできる人だったことも思い出した。

「そっか、じゃあ高校に上がってからも続けようと思っていたサッカーを辞めて、クラスにもあんまり馴染めてなくて、軽音であんまり自分をさらけ出せない友達と普段生活してるってことか。」  
 というので、随分ストレートに言うな、と思ったけれど、実際に客観視したらそう見えてしまっていたのかということが思ったよりも少しショックで、僕は「そうだね」と少し笑いながら小声で返した。あまりにも話に花が咲いて、二つ揃いで運ばれてきたオムライスを食べることすら忘れていた。おかげでオムライスのデミグラスソースは、少し膜を張っていた。

まだギリギリふわふわの玉子焼きにスプーンを入れて、チキンライスも一緒に、加えてソースをたっぷりと掬った贅沢な一口を僕が口に運ぼうとしたとき、何かを考えこんでいたように見えていた七月が、

「今度の土曜日、俺の友達が集まるパーティにこない？」  
 と、誘ってきた。

多分、いや、絶対、七月から出ている空気が変わった。じつと僕の顔を見つめてくる七月の大きい黒目の中で、スプーンの上で作られた小さなオムライスを食べようとしている僕が反転して映っているのが見えた。

ハッとして、スプーンを皿に置き、なんと返事をすれば良いか僕は迷った挙句、なんだか店内のファミレスの空調が思ったより効きすぎていると思つて、僕は店員を探す素振りをしたけれど、七月は、止めなかった。

「柝が知ってるかわからないけど、『ダムキナの会』っていう、僕にとつての、心の拠り所のような、家族のような場所があるんだ。」

僕はそれを知っている。「ダムキナの会」と言えば、日本でもかなり有名な宗教団体だからだった。以前、僕の家の中に「秀星党」という政党からの出馬者の選挙ポスターが勝手に貼られてしまったことがあった。それに対して、選挙事務所に抗議の電話を入れていた父親に、その抗議の理由を聞いたとき、秀星党を運営しているダムキナ

の会のことを知った。

「中学のときからそこで、学校では教えてくれないようなことをたくさん学んでたんだ。なあ、知ってるか？ 先進国の中で、俺らみたいな十代そこらの若い世代の自殺率が高いのは、日本だけなんだ。なあ柝、お前が気づいてたかわからないけどさ、俺、中学二年の時に、いじめにあつてさ。でも、そのことを担任に相談しても、あいつは見えぬふりをしたんだ。でもなぜだか後になって、あいつは俺に謝ってきて、来年も俺が入るクラスの担任になって、俺の成績を裏で操作して点数を上げること、そして、塾へ通うために、学校を休んでも卒業させてくれる許可をくれたんだよ。」

七月の脳のなかのどこかの部分が、発熱しているんじゃないかと思うほど、彼は何かに取り憑かれたように止まらない。

「実は、俺が通つたのは塾じゃなくて、本当はダムキナだったんだ。俺が行きたかった、いや、行かなきゃいけなかった高校も、ダムキナが運営してて、俺は、ここで、高校に入学したあとの勉強をずっとしてんだ。」

それでようやく、来年の春からさ、俺はそこで、十代や二十代前半の若いダムキナのメンバーで構成されたチームのリーダーになるんだ。ダムキナにはさ、色んなことで悩んでる人がいっぱいいるんだ。例えば、親に捨てられた子とか、事故や病気で家族が先に逝ってしまった人とか——でも、

なにも全員が重い悩みを抱えてるわけなんかじゃなくて、失恋したり、受験に失敗しちゃったり、そういう悩みを打ち明けに来てる人もいるし、祈みたいに学校のクラスメイトと馴染めなくて、居場所がなくなつたように感じて、ダムキナに来てる子もいるんだ。今の祈の話聞いててさ、もしかしたらダムキナが「救い」になってあげられるのかもしれないと思ってさ——。」

いつだったか、夕飯時に見た医学のバラエティ番組で、人間は聞きたくない、知りたくないことは本能的に避けるようにプログラムされているらしい、と脳科学を研究している医者が話していた。それが本当だったら、悲しみに溺れて、傷つく人間はだれ一人として存在しないはずじゃないかと思つたことを思い出した。

でも、今日、テレビの中の医者が話していたことは本当であつたと、僕は思った。

最初、馬が合わないだろうと決めつけていた相手と、のめりこむように打ち解けあつてできた僕らの友情は、運命的であつたと思うときもあつた。でもそれは、もしかしたらデザインされた円盤の上で必然的に仕組まれて生まれたものだったのかもしれない。そしてその円盤は万華鏡の中でゆつくりと回転し、今、まさに覗いていた模様がいつのまにか思い出せない過去の模様が変わるように、いつの間にか七月は、僕の知らない七月になっていた。

——ガタンゴトンと揺られる電車の中では、ほとんどこを下を向いて画面を覗いている。僕も、その内の一人だ。画面を見つめ、耳をふさぐと、どこで誰といても一人になった気分になれる。でも、どこからか、視線を感じる。

ふと顔を上げると、扉の横に、アクリル板の中に入った、「これを読めばあなたの未来は変えられる！」と大きく書かれたポスターにニッコリと笑う七月が載つた広告がデカデカと掲示されている。目を凝らすと、右下に小さく「ダムキナ出版」と書かれていた。

七月が纏う高そうな黒々としたスーツの胸に、安いリクルートスーツを纏った僕がボヤッと乱反射している。僕は、大学四年生になった。大人になると、過去のいまいち理解できずに霧がかかっていた物事の意味が急に分かるようになるのは、いったいどういう原理が働いているんだろう。

——七月が、急に本を読み始めた中学三年生の夏休み前、おそらく彼が読んでいたのは、ダムキナの会の指導者である彼の父親が書いた、宗教徒になるための教材だった。

あの日、ファミレスで僕らが久しぶりに会つた日、七月は、自分の父親はダムキナ神に認められ、自分はその血を継いで産まれてきたから、「俺は神の子なんだ」とファミレスで熱く僕に語つた七月の顔は、今でも脳裏に焼き付いている。

「ごめんね七月、俺はそういうのに興味ないから、大丈夫だよ。」

ファミレスを出てから僕は言った。七月にとつてダムキナの会がどのようなものなのかを僕は完璧に理解できたわけではないけれど、ダムキナの会は七月にとつて一番といって良いほどに大切ななにかとして彼の中に存在していることくらいは理解できた。

だから、しっかりと自分の意思で断らなければ、七月に失礼になると思つた。これからも、大切な「友達」として、付き合っていくために。

すると、七月は澄ました顔をし、僕を見つめて、「せっかく俺とお近づきになれたのに、残念だね」と捨てセリフを吐いて、振り返りもせず足早に人ごみに消えていつた七月の背中を、僕は忘れられない。

——どうやら七月は、次のステップとして、秀星党から出馬するらしい。SNSで彼の政見放送が、「すごく親しみやすそう」「若くて期待の星、まさに秀星」「こういう風な大人になりたい」などのつぶやきが拡散され、話題になっていた。どこかの局のニュースが投稿の統計調査をした結果、その支持の多くが、選挙権を得たばかりの十八歳であつたと報じた。番組ではコメントーターが、「宗教団体が母体の政党が支持されることは一種の危険性を孕むことになる」と発言したことをきっかけに、若い世代での選挙に対する教

育がなっていないだとか、宗教団体がどのような存在であることを教えるべきであるとか、事が大きくなつて、議論されていたのを、先日テレビで見た。

僕のSNSのタイムラインにも流れてきた、話題の政権放送の動画で、「みなさん、少しでも僕に時間をくれませんか」と一息置いて話し出す彼の姿を、僕は見なかったことにした。

## コメント

この作品の土台みたいなものを初めて書いたのは、大学二年生のときくらいだったと思います。実際に私に、この作品と似たような出来事が起こりました。それから、今日こうして作品を提出するまで、何度も書き直しました。

私に、この作品を通して、特定の宗教および、それを信仰なさっている人を揶揄するつもりは毛頭ありません。実際に似たような状況に私が置かれていたときに、私がまず感じていたのは、その友人と疎遠になってしまったことの寂しさや、真に友人として見られていたんだろうかという猜疑心とその友人に向けることになってしまったことが悲しかったのです。

作中の締めは、主人公である柝たけが、七月の政見放送を「見なかったことにした」としました。もちろん、読者の受け手によってさまざまに考察していただきたい部分ではありますが、もし私だったら、あの頃、隔ての気持ちなどまるでなかった純粋な友人としての七月だけを思い出していた、柝たけのエゴ的な一面が表れているんじゃないかと思えます。

この度は、ご精読いただきまして、誠にありがとうございました。ありがとうございました。